

## 魅力あふれる東北の拠点都市へ

### 1. はじめに

盛岡のまちづくりは、今からおよそ400年前の慶長年間、北上川と中津川が合流し丘陵に囲まれた不來方の地に築城したことから始まります。城下町の町割りが現在の中心市街地の骨格となり、その情緒と風格を伝えながら現在の中心市街地が形成されています。



市中心部の盛岡城跡

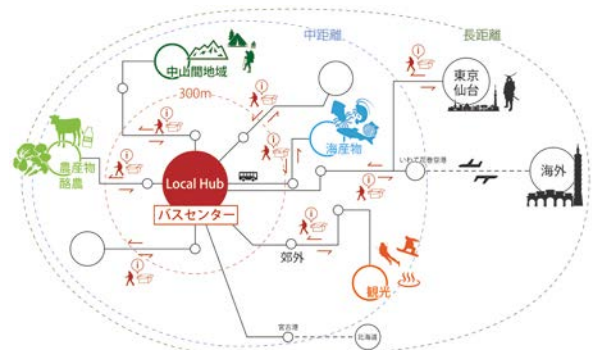
昭和期における人口や産業の拡大を背景に、既存市街地から南西方向に向けて市街地を伸ばし、歴史ある既存市街地を守りながら都市の成長を図ってきましたが、人口減少時代の到来を踏まえ、コンパクト・プラス・ネットワークの都市構造へと都市づくりに方向を定め、魅力と活力あるまちづくりを推進しています。

### 2. ローカルハブ＝盛岡バスセンターの整備

盛岡バスセンターは、1960年に当時の商業の中心であった河南地区に建設され、バスのターミナルとしての役割を担うとともに、施設内のレトロな雰囲気が人気で多くの人々に愛されてきました。

しかし、施設の老朽化等により、2016年9月に市民に惜しまれながら営業が終了したため、市がその跡地を購入し、公民連携事業により、にぎわい機能をもつ安全・安心な施設として2022年秋のオープンを目指して建設を進めています。

新しい盛岡バスセンターは、地域の交通を支える結節点「Traffic Hub (トラフィックハブ)」である強みを活かし、本市が抱える都市・地域経営課題の解決を図り、更には周辺の中山間地域、県沿岸部などの地域課題の解決も目指します。また、市中心部と周辺地域がバスで繋がりが、周辺のローカルな魅力あふれる生産物や観光情報が「盛岡バスセンター」に集まる「Local Hub (ローカルハブ)」として、バスセンター周辺の活性化だけでなく、モノ、コトのつながりにより、周辺地域の産業育成を図るとともに、盛岡広域圏や仙台、関東圏からの訪問者の増加により、二拠点居住や移住促進に寄与するなど、多様な人々が繋がるハブ(拠点)を目指しています。



人と地域をつなぐ結節点「Local Hub」としてのバスセンター



盛岡市長 谷藤裕明

### 3. 都心「内丸団地」の再生

内丸団地は、本市の都市計画を象徴するものとして1957年に全国第1号の都市計画一団地の官公庁施設が定められ、盛岡都市圏の都心を形成しています。



一団地の官公庁施設（内丸団地）

現在、建物群の老朽化の進行が顕著になり、やむを得ず区域外に移転せざるを得ないケースも見られ、地区の個性や求心力の低下が懸念されています。このため、「内丸地区将来ビジョン」を2022年3月に策定し、「県都の核として社会経済を牽引」「内丸城下の風格と都心空間の調和」「英知が集い未来を創造する」の3つのあるべき姿を掲げました。

このビジョンの実現化に向け、2022年度から整備プランづくりをスタートします。当地区は、盛岡の顔であり、関係者等と十分に議論を重ねながら、盛岡のアイデンティティーを次世代につなげるプランにしたいと考えています。

### 4. 新たな物流拠点の整備

盛岡市は、東京から約540km、東北新幹線で約

2時間あまりの位置にあります。また、東北縦貫自動車道を軸として、青森、秋田、三陸（宮古）方面の国道が本市で結ばれ、交通の要衝として拠点性が極めて高いことが強みです。

この拠点性を生かし、県都としての求心力を高めるため、商工業の振興や安定した雇用の創出など産業振興に取り組んできましたが、物流業界におけるいわゆる2024年問題を背景に、北東北3県をカバーする新たな拠点ニーズが高まっており、流通系の開発ポテンシャルが高い東北縦貫自動車道のインターチェンジ周辺の約75haを物流拠点として整備する方針を打ち出しました。

物流拠点の整備は、盛岡地域のさらなる産業振興や雇用創出の効果のほか、近接する中央卸売市場と連携して域内循環の拠点整備にもつながるものであり、引いては盛岡地域のみならず全県に効果が波及するものと考えています。また、近接する盛岡貨物ターミナルの活用を図ることにより、モーダルシフトへの取組を推進し、企業のカーボンニュートラル需要に応じていくほか、インランドデポを活用し、海外輸出の推進とローカルハブ機能の強化にもつなげるなど、本市のもつ利点を最大限に生かして都市の活力を高めていきます。

### 5. おわりに

宮沢賢治が歩いた黄昏の中津川河川敷。石川啄木が草の上に寝こんで詩を詠んだ盛岡城跡。盛岡のまちなかには、このような風景が今も息づいています。盛岡らしさをまちづくりの中心に据え、人々がいきいきと暮らし、魅力あふれる東北の拠点都市を目指したまちづくりを推進してまいります。